「ミスケン！」

（『エスケン！』スピンオフNo.弐）

なかまる

木元健治は語学棟の窓外に紅い葉を見てすっかり秋になったなあと和む。
先輩たちが先輩たちなのでなかなか本性を出せないが、意外にこう見えてベタ好きなのだ。
常日頃、愛読書は私立探偵マイク・ハマーシリーズで有名なミッキー・スピレインだなどと嘯いているが、実は永瀬正敏主演の『私立探偵濱マイク』から入ったなどとは口が裂けてもいえない。ミステリヴァージンを奪われたのが、チャンドラーからでも、ロス・マクドナルドからでもなく、西尾維新の戯言シリーズにだなどという事実は、もう絶対に墓場まで隠していきたい秘密だ。
秋の陽光は穏やかで程よく温まった机に木元は頬を寄せた。先ほどから教授の言葉がぐわんぐわんと右から左から揺さぶりをかけてくる。
「ああ。いい陽気だ。このまま眠ってしまおうか」と思わず呟いてしまったその時、脳天に天罰が墜ちた。
背後から頭を殴打され、額を鋭く机に打ち付けた。ばっちぃいんと酷い音が講堂内に響き渡って、一瞬生徒たちが静まり返った。
その雷は教授からではない。
頭を上げると、教授も他の生徒同様ぽかんと口を開けて木元の方を注視している。木元を見つめる、目、目、目。その瞳の数、二十四は大きく通り越して、果たして幾つの瞳が木元を見ていることだろうか。男、木元健治、齢十九歳。これまでの人生の中でここまでの注目は浴びたことがない。顔から火が出るほどの恥辱。穴があったら入りたい。
木元が額を摩りながら、背後を振り返ると犬飼肇と、猿渡おさむが机から乗り出し拳を固めていた。

ミステリ研究会、略してミス研の先輩ふたり。変わり者で有名でふたりのせいで喰らった、とばっちりは数知れず。
「今、ベタ妄想をしていたね」犬飼部長は言下に斬った。
木元はその科白に、ズキュ～ンと心臓を撃ち抜かれる。
確かに、ベタベタなことを考えていた。心を読めるのか、こいつ。まさか新手のスタンド使いか？
犬飼部長は不敵な笑みを浮かべている。効果音をつけるなら、さしずめゴゴゴゴゴ……、だ。
「さすが、ししょ～」
すかさず傍らに控える猿渡がヨイショする。絶妙な合いの手だ。
同じミス研、同じ釜の飯を喰う先輩だが正直、木元はこの男に好意をもてない。強きに甘え弱きを潰す。性格最悪。激烈愚劣。マイナス点を挙げればキリがない。
そんな猿渡も密室トリックに関しては、絶海の孤島ばりの知識を持っている。その一点は尊敬していて木元はこの先輩を殴らずにいる。
「キジ太君っ」
犬飼部長が言った。
「キジ太じゃないって言ってるじゃないですか」
「何を言うんだ。イヌ、サルときたら桃太郎の見立て。ここにキジが来るのが自然な流れだろう。もし『桃太郎坂の殺人』とか『桃館の冒険』とか『桃太郎症候群』とかそういうタイトルで、イヌ、サル、マグロだったら、著者の怠慢を糾弾すべきだろうっ」
「どんなミステリですかそれ。っていうか、部長、授業中ですから。もう少し静かに」
犬飼部長は遠慮を知らない。教授より大きな胴間声が講義室に

響き渡る。
周囲の非難の目が木元には痛い。
「続いて唱和せよっ。ミス研の掟そのいぃっち」
犬飼部長は気にした素振りはない。
仕方なく、木元はこの場をやり過ごすために相手に合わせる。
「ミス研の……」
「声を大きくっ。ミス研の掟っ。ベタ妄想禁止っ」
「君達。今は授業中だよ」さすがに教授が見るに見かねて近寄ってきた。しかし深入りしたくないのか、若干腰が引けている。「静かにしていられないのなら、出て行ってくれないか」
僕はこの騒動には巻き込まれてるだけですよ、と木元は目で訴えるがその視線は届かない。ああ。これで単位なしだ。
「ええいっ。埒があかん。拉致だ」
「さすが、ししょ〜。洒落てますね」
「いらんことはいいから、持ってきな」
「御意」
「あ〜れ〜」
かくして、哀れ木元は本日も先輩たちの悪の手によって連れ去られていくのであった。

サークル棟三階、ミス研の部室。
部室の前には「来たれ若人」と新入生を呼び込む看板が立っている。紫煙をくゆらす男の切り絵のデザインは、木元が先輩たちにやらされものだ。（本編『脅威の新人現る』参照）さすが陶芸家の息子、手先が器用なのだ。
「未曾有の経済危機である」

全てを説明した犬飼部長の言葉は重々しかった。
「つまり部長、格好いい感じでまとめようとしてますけど、サークル運営費で呑み過ぎたってことですよね」
「キジ太っ。下っ端の癖して声がでかい」
猿渡に頭を小突かれる。エス研の連中なら『殴ったな。親にもぶたれたことないのに』と切り返すところだろう。
その下っ端に毎回毎回頼っているのは、どこのどいつだよと木元は苛立つ。
「これでは年末恒例の納会が出来ぬ。納会が出来ぬならば冬が越せぬ」猿渡がとうとうと説いた。
その理論はどうかと思うが。
酒が呑めない木元は飲み会全般に思い入れがない。
「先年の小説コンでエス研に負けてさえいなければ。賞金が入ってきたのに。やはり憎し、エス研」
猿渡は机をばんっと叩いた。
「過ぎたるは及ばざるが如し。もうその話はやめようよ、猿渡君」
「さすがししょ～」
猿渡は感涙にむせび、犬飼部長はそっと肩を叩いた。
木元はふたりの師弟漫才に付き合うのがいい加減、面倒になってきていたので「サークル運営部に談判して臨時予算を捻出してもらうこと出来ないんですか」と適当な提案をする。
「浅知恵、浅知恵」
木元は再び猿渡に額を突かれた。苛々が募る。
「何故ですか」
猿渡は口許を隠してほほほと笑った。気色が悪い。
「サークル運営部の奴らに使い込みがばれたら、お家断絶、サー

クル取壊しの危機」
「じゃあ、どうすんですか」
「今回は私に珍案がある」
「さすがししょ～」
猿渡のヨイショがいよいよ冴え渡る。
「来月の頭から大学祭だ」
「あ、そうですね。そろそろ生麺発注しないと」と木元。
ミス研では毎年、『密室ラーメン』というラーメン屋台を出店するのが習わしになっている。もちろん腕を振るうのは木元の役目だ。
すると猿渡がほほほと笑い、口を開いた。
「すっかり忘れておったな。粗忽、そこ、うごぅるぁ」
堪え切れなくなった木元の鉄拳が猿渡の顔面に炸裂し、倒れ込んだ。
「ぶたないで、おねがい」
すると急に猿渡は塩らしくなった。
犬飼部長は事態を気にせず、懐から一枚の紙を取り出した。
「私が命がけでさる事情通から奪取したものだが」
どれどれと木元は紙を覗き込む。猿渡も恐る恐る見る。
命がけ、というのは言いすぎだ。
それは学園祭実行委員会手製の企画表だった。事務局資料はよくコピーされるから、木元も学内コンビニのコピー機に置き忘れられているのを、よく目にする。
「今年は青空球児・好児のライブですか。いくらお笑いブームだからって、ちょっとマニアックすぎやしないですかね」
「木元よ。見るのはそこではない」

「ほほ。浅ぢぃ……、ぐぅるおお」
木元の鉄拳、再び！
「ここを見よっ」
びしぃっと犬飼部長は紙面のある部分を指差す。
「み、す、こ、ん？」
「ミスコン」
木元に殴られて変なスイッチが入ったのか、猿渡は物凄い勢いで自らのラップトップパソコンを起動させると、起動音に合わせて「む～ん、む～ん」と唸りながら、カタカタとキーボードを叩き始めた。
「出たっ」木元はモニタを覗き込む。ウィキペデァのページだ。
「『よみこみ君』起動っ」
ソフトウェアが立ち上がり、無味乾燥な電子音声がテキストを読み出した。
『ミス・コンテストは、国際貢献活動の親善大使や観光キャンペーン活動を担当する女性を対象としたコンテストである。「ミスコン」と略されることもある。「ミス〇〇」は、未婚女性を中心としたコンテスト。そのため、最近ではフェミニストが中心となって一部自治体などにおいて「ミス〇〇」という表現が差別的だとして「〇〇大使」などと名称を変更し、既婚女性や男性でも参加可能としているところも出てきている
（引用元：http://jaw.kipedia.org/w.ki/%E3%83%9F%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%B9%E3%83%88）』

「引用ありがとう。猿渡よ」犬飼部長が言う。「まあ、色々問題になってはいるようだが、
その渦中において我らが大学祭事務局では、今年初めてミスコンを開催する算段らしい」
木元は、相槌を打つ。話が読めない。
「時に、猿渡君。そのソフトウェアは?」
話が飛んだ。
猿渡は明らかに焦った様子で、しどろもどろに弁明を始めるが行ったり来たりで論を結ばない。
耐え切れなかったのか、犬飼部長が「どこで手に入れたっ」と一喝すると猿渡は小さくなって「エス研の御堂に教わったフリーソフトです」と白状した。
「エス研は敵だっ。何故そんなことをっ。何故損なことをっ。何故、おんなおとこをっ」
犬飼部長の言っていることは意味不明だが、激昂していることだけは分かった。猿渡も震え上がっている。
「ミス研の掟そのにぃっ」
猿渡は慌てて起立し、唱和する。
「ミステリ以外の文芸作品は断固排除ぉぉぉ」
犬飼部長と猿渡の声がサークル棟に木霊する。
どこの運動部だここは。木元は眩暈を起こしかける。
「猿渡よ。評点マイナス十点」
「がぁ〜ん」
擬音を叫んで猿渡は大袈裟に仰け反った。
評点ってなんだよ。
「話が逸れた」と犬飼部長はその一言で場を終息させた。

猿渡は木元の目にも可哀相なくらい悲壮感を漂わせ、肩を落として座り込んでいる。
「ミスコン開催は、大学始まって以来のことだ。大学祭実行委員は、このイベントを今回の学園祭の目玉にしようと思っているらしい。ミスコン入賞者には高額賞金が出るという噂もある。そこで」
「その賞金でサークル費の穴埋めをするわけですね」
「その通り。今日から学園祭までミス研の『ミス』はミスコンの『ミス』だぁっ」
「でも、うちには女子いないですよ」
「そこで考えた」犬飼部長は頬を赤らめた。正直、気色が悪い。
「エス研の小雪副部長を勧誘する」
「え。それって、エス研に協力を仰ぐってこと、ですよね」
「ミス研の掟その2は?」おずおずと猿渡が聞く。
「これはこれ。それはそれ」
木元と猿渡は思わず、椅子からずり落ちた。

「誰がやると思ってんの」それが天涯小雪の返答。
場所は学内喫茶店。帰りがけの天涯小雪に声をかけ、なんとか説得してここまで連れてきたのが三十分前。
天涯小雪の鋭い眼光に晒されながらも、朗々と事情を説明しきった犬飼部長を木元は尊敬する。あの睨みに射られたら自分だったら失神してしまうだろう。
天涯小雪はエス研唯一の武等派だ。関東一円の暴走族を束ねていて、全国行脚の如く主要都市の刑務所にはすべてお世話になっているという噂もある。

もう、事情を説明できただけで良いじゃないか、よくやりましたよ部長、と木元は胸中で讃えあげた。
しかし犬飼部長はさらに攻め込むつもりのようだ。天涯小雪の返答に大袈裟に驚いて肩を竦めて見せた。
「WHY？　何故に。賞金はフィフティ、フィフティだと言ってるのに」
「面倒」
ぼそっと呟くと天涯小雪はジッポの蓋を開いて、咥えた煙草に火を点けた。
暖簾に腕押し、ぬかに釘、なしのつぶて……、は少々意味が違うか。
木元が気が進まないのは、犬飼部長の女性を見る眼にもある。目の前に座る大柄なハードSFしか能のない女のどこにミスコン審査員は魅力を感じるというのだろうか。
木元の思いが伝わったのか、天涯小雪がこちらに顔を向けた。
思念が読まれた？　こえぇ。
木元は思わず震え上がる。
スタンド使い同士は引かれ合うものだ。犬飼部長だけではなく、まさか、こいつもスタンド使いなのか？
ミス研と天涯小雪との因縁は深い。先年の学内小説コンは犬飼部長の作品を蹴落とし、天涯小雪の作品が入賞した。もともと犬猿の仲だったが、さらにそれが深まった。憎しエス研とは、憎し天涯小雪なのである。それのはずなのに、何故犬飼部長が天涯小雪に協力を依頼しようとしているのか、木元には本意が分からなかった。
「そこをなんとか。このとおりだっ」

その時、犬飼部長が叫んだ。
木元は驚いた。見ると隣の猿渡も口をあんぐりと開けている。
犬飼部長がテーブルに頭をこすりつけんばかりに、頭を下げている。
天涯小雪も表情を凍りつかせる。
しばし沈黙が訪れた。
通りがかりのスポーツバッグを肩にかけた女子三人が、楽しげに喋っていたのに急に黙った。
しかし犬飼部長の行為には一点の曇りもない。
プライドの高い犬飼部長がこのような屈辱的な行為を。これもひとえにミス研のため。ひいては自分たちのため。
木元も犬飼部長に倣った。
隣の猿渡は、随分躊躇したが、木元が「猿渡さん」と低い声で唸ると、渋々、頭を下げた。
「七、三だ」
「はい？」
天涯小雪の言葉に、ミス研桃太郎三人衆は一斉に顔を上げる。
「賞金の分け前だ。私が七で、お前たちが三。それなら受けてやる」
「言うにことかいて」猿渡が立ち上がりかけ、それをさっと犬飼部長が制止した。
「分かった。その条件で飲もう。交渉成立だ」

その日からミスコン入賞に向けての猛烈な対策が始まった。
天涯小雪は、壊滅的に女子的要素に疎かった。
そして残念ながら、おんなっ気のない桃太郎三人衆にもそれは

言えた。
「まずは研究だ。ファッション誌を買おう」犬飼部長が指摘した。
「しかしどれを」
三人は大学コンビニの女性誌コーナーに立ち、天涯小雪を振り返るが本人は、さあと首を傾げる。
「この際、すべて買っていこう」という犬飼部長の宣言により、次から次へとカゴに入れていく。
「で、誰がレジに?」
「面倒。私はいや」と天涯小雪が早々に断った。
それで仕方なく、ミス研三人衆はじゃんけんを行い、猿渡が負けた。
「なんという屈辱か」よよと泣きながら、猿渡は会計を済ませる。
例の学内喫茶店に集まり作戦会議。
「ふむ。女子力アップには、強めが決め手だそうだぞ」
「こっちには愛されメイクはオレンジでと書いてあんな。けっ。なんだよ愛されって」
「恋愛偏差値捜査隊? うわ、この記事えげつないっすねぇ。女子はこんなの読んでるんだ」
「お勧め読書コーナーっって、誰がお勧めしてんの。ハードエスエフがひとつも入ってないんだけど」
とまあそれぞれの雑誌を回し読みした結果、一同はあることに気付いた。
「この雑誌、路線がそれぞれ違わないっすかね。少し絞った方がよくないっすか」と木元が提案する。
「浅知恵、浅知恵。そこには先に気付いておったわ。このギャルサーの掟が載ってる雑誌と、今年のかわいいは白色ワンピの雑誌

では明らかに違うのは自明の理」
「『ミステリマガジン』と『ＳＦマガジン』の読者がかぶらないようなものか」
「『ＳＦマガジン』と『ＳＦＪ』だって大きく違うよ。で、どの雑誌にするの」と言った天涯小雪に視線が集まった。「あ。私はどれでもいいから、あんた達決めて」
　それでミス研桃太郎三人衆はそれぞれああでもない、こうでもないと意見を交し合ったが決まらない。そこで犬飼部長に決定権を譲ることにした。
「ふむ」と犬飼部長は赤面しながら「『理由』の演技も良かったし、この宮崎あおいが表紙の雑誌がいいと思うんだが」
　その一言で、方向性が決まった。
「それでは、次にその雑誌に載っている服を買うのだ」
「どこで買うんすか」
「まあ、駅前デパート行けば売ってるだろ」
「ああ。たぶんないよ」とは天涯小雪。「こんな埼玉の奥地に最新のブランドの服、置いてると思う?」
　男たち三人は顔を見合わせた。
　大学から新宿まで電車に小一時間揺られた。大学の付近に住んでいる桃太郎三人衆にとって東京に出るのはちょっとしたイベントだ。
「まさか、服なんかのためにわざわざ東京出るとはっ」
「ああ。人がおおいよお」
「猿渡先輩、なんかキャラ変わってます」
「あんたら、どんだけおのぼりさんなわけ」と都内から通う天涯小雪だけは呆れ顔だ。

そしてデパート。
「たかいっ。何故にシャツ一枚で一万円もするのか。理解し難い」
「犬飼部長、こっちなんか見てくださいよ。こんな小さな財布が、十万円ですよ」
「ああ。人がおおいよお」
「で。私はどれを着れば良いわけ」
「それは事前に犬飼部長の好みを反映して」
「キジ太君っ。君はなにをいっとるんだっ。私、一個人の好みではなくっ」
「はいはい。分かった、わかった。化粧品も買ってくれんでしょ。早く決めないと時間なくなっちゃうんじゃないの」
「ああ。人がおおいよお」
「なんか、これどんどん運営費が減っている気がするんですけど」
このような感じで服・メイク・ヘアカットと外見の大改造が進められた。
「ミスコンは見た目以上に中味も重要なんじゃないですか」という木元のアドバイスもあった。
「中味ってどういうことだよ」
「キャラクタですよ。なんかこう人に愛されるような。例えば、可愛い子が合気道とかやってると見た目だけじゃなくて、実は意志が強いような気がするじゃないですか」
「うむ。見た目と中身のギャップは大切だな」犬飼部長は大きく頷く。
「ギャップねえ」
「天涯さん、人に負けない趣味とかないんですか」
「ハードSFの知識なら負けねえ自信あるぞ」

男たち三人、絶句。
「あ。特に海外の理論系な。目が醒めるようなやつ。あと意外に、日本の昭和ＳＦも読んでる。光瀬龍とか、小松左京とか。馬鹿にする奴いるけど、星新一のショートショートとかすげえよ」
一同は頭を抱えてしまった。
「それは見たままだな」
「見たまんまですね」
「ほほっ。広がりがねえっ」
「うっさいな」
天涯小雪が噛み付く。
「小さい頃の習い事とか、どうですか」
「習い事ねえ」暫し思案する天涯。「そろばんをやらされてたな」
「そろばん？」
「段位を持ってる」
「そろばんに段位なんかあるんですか」
「四桁の暗算ができる」
「それは凄いな。でも、そんなんでいいのだろうか」
「もっとかわいいのないんですか」
「例えば？」
「グーグーガンモの物真似とか」
「ほっほっほ。それ何時代のアイドルか。キジ太、考え方が古いっ」

学園祭まで残すところ一週間となったある日。ミスコンの対策も着々と進んでいた。
木元は珍しく、犬飼部長と帰りの駅のホームでばったり出くわ

した。
「キジ太君ではないか」
「あれ。犬飼部長。こんにちは」
木元は犬飼部長とあまり二人きりになったことがない。
この何を何を考えているのかさっぱりな部長と会話が続かない。そもそも話題を振るのが恐ろしい。下手な話題を振って莫迦にされたらと思うと、恐怖があった。
下りの線は出たばかりだった。次まで随分待つことになる。
正直、気まずい……。
木元は、早く電車が来ないかとじっと電光掲示板を睨んでいた。
隣に立つ犬飼部長は、あまり気にした風もない。
「木元君」
だから、犬飼部長が口を開いた時、木元の返事には強い安堵が含まれていた。
木元が振り返ると犬飼部長は少し困ったような顔をした。
唇を舐め、少し言いよどんでから決心したように口を開いた。
「どうして、エス研とうちはいがみあってんだろな」
「え」
木元はびっくりした。犬飼部長はエス研のことを嫌っている急先鋒だと思っていたのに。それに疑念を挟んでいるというのか。
しかしよく考えてみると、何故いがみあっているのかも分からない。
「昨年の小説コン、あれは本当に……」
木元は聞き返す。実際、普段なら迷いのない犬飼部長の声は小さく、後半はよく聞き取れなかった。
「なんでもない。独り言だ」犬飼部長はかぶりを振った。

まさか、犬飼部長。今回のミスコンをエス研の副部長に協力をあおいだのは……。木元がそれを口にしかけた時、ホームに電車が滑り込んできた。
結局タイミングを逸して、それを問うことは出来なかった。

そして、学園祭当日。すなわちミスコン当日。
やることは、やった。
「よお」
「は？」
「これは……」
「あの……」
時間になって現れた天涯小雪の姿に、一同唖然とした。
「なんだよ。おい」
「まあ、化けるもんだな」猿渡がぽつりと呟いたのに、天涯小雪はごつんと鉄拳を食らわした。
「莫迦にしてんだろ、お前」
「そんなことないですよ。綺麗です」木元が慌ててフォローを入れる。
目立つようにと犬飼部長が選んだ赤いニットのワンピースは、実際天涯小雪によく似合っていた。七分丈のパンツも元々の脚の長さが強調されてスタイルが良く見える。
化粧も華やかだ。デパートの化粧品売場でも言われたが普段いじっていない分、化粧品のノリも良いらしい。青山の美容室でやってもらったヘアスタイルもばっちり決まっている。
本当にこれが天涯小雪か、という化け方だった。
「これで優勝間違いなしだろ」と犬飼部長がいった。

天涯小雪は仏頂面になった。照れているのだ。
「ありがとよ。なんかお前らのことが少し好きになったよ。敵だけど」
「ああ。私もだ」とは犬飼部長。「いつぞやの小説コンのことは水に流そう。まあ敵だということは変わらないがね」
ミス研の部長とエス研副部長が、がっちりと握手を交わした。
木元は武者震いした。犬飼部長の度量の大きさに。
自分は歴史的瞬間に立ち会っているのだ。そう、今はいがみ合っている時ではない。
「そろそろ時間じゃないか」と猿渡。
「ああ。じゃあ、エントリしてくる」
天涯小雪は颯爽と駆け出していった。
「優勝できるといいですね」
「ああそうだな」
犬飼部長が笑みを零したのを木元は見逃していた。

「部長、これはどういうことですか」
舞台の袖から現れた天涯小雪の眼光は鋭く、三人を射抜いていた。
慌てて木元は目を逸らした。
隣の犬飼部長は泰然自若とした態度でほくそ笑んだ。
「ははは。愉快愉快。公衆の面前で赤恥を晒すが良いわ。
壇上に立つのは天涯小雪以外は、もっさりとしたオタク風情の男性ばかり。
明らかに天涯小雪は異彩を放っている。
「それでは、第一回ミスコン。すなわちミステリコンテストを始

めます」
「これでやつもミステリの重要性が身にしみて分かろうて。そうやすやすと、あの小説コンの恨み、水に流せるわけがなかろう」
犬飼部長の高笑いの中、木元はがっくりと肩を落とすのだった。
ミス研とエス研の闘争の歴史はまだ長く続く。

「っていうか、犬飼部長。これからの運営費どうするんですか」
「まあ、それはこれ。これはそれ」
「納会の予算がぁ……」

Fin　（本編に続く？）